フランス文学と愛

野崎 歓

講談社現代新書
2228

フランス文学と愛

野崎歓

常州大学图书馆
藏书章

講談社現代新書
2228

N.D.C. 954　268p　18cm
ISBN978-4-06-288228-6

講談社現代新書　2228
フランス文学と愛
二〇一三年一〇月二〇日第一刷発行

著　者　野崎歓　© Kan Nozaki 2013
発行者　鈴木哲
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電　話　出版部　〇三―五三九五―三五二一
販売部　〇三―五三九五―五八一七
業務部　〇三―五三九五―三六一五
装幀者　中島英樹
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定価はカバーに表示してあります　Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉
複写を希望される場合は、日本複製権センター（電話〇三―三四〇一―二三八二）にご連絡ください。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。

目次

はじめに ―― 3

第一章 太陽王と恋の世紀 ―― 9

太陽王の肖像／雅びの道／才女たちの見る夢／義務と恋愛／呪いの炎／寝取られ亭主の問題／結婚の理想と現実／恋愛結婚の礼賛／反ギャラントリー／恋愛との決別

第二章 快楽の自由思想 ―― 37

表紙の誘惑／摂政と極道たち／愛の支配力／ファム・ファタルの世紀／好色文学と哲学／フィロゾフたちの愛／ルソー、真実の愛／結婚はいかにあるべきか／支配への欲望／サド侯爵と清純派

第三章 感情教育 ―― 73

大革命のあと／モーパッサンの老婦人／十九世紀とは何か／「坊や」の登場／会話力不

足／母親の胸／「彼の女」と「わが奥方」／至福のとき／心身二元論／干からびた果実／「幻」のゆくえ

第四章　結婚と愛　113

十二世紀の判決／地獄のほうがまし／愛のある結婚に向けて／二つの道／結婚、家庭、国家／不幸な結婚のリアリズム／不幸を希求する小説／幸福な夫／不穏な妻／エロティシズム／ささやかな真実／愛から殺人へ／限界を超える小説／愛に満ちた結婚は何処に

第五章　親子の愛　163

母性愛の神話、子供の不在／子供の全面肯定／母から娘へのラブレター／父親失格者の弁／失われた子供を求めて／ユゴーと幼児／虐げられる親たち／虐げられる子供たち／愛の鞭／作家への道／子供への愛とは何か

第六章　解放と現在　221

十九世紀との決別／女たちによる愛の奪還／不可能な愛／強奪と恍惚／オートフィクション／聖家族／黄昏のセクシュアリティ？／革命のあとに

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

おわりに 257
参考文献 261

フランス文学と愛

野崎 歓

講談社現代新書
2228

はじめに

トーマス・マンの長編『魔の山』の真ん中、上下巻の文庫本で読むなら上巻の終わりごろ、主人公のドイツ人青年ハンス・カストルプにとって大一番というべき局面が訪れる。ひそかに、激しく魅かれていたエキゾチックな美女クラウディアとさしむかいになって、昵懇（じっこん）に語り合う機会に恵まれたのだ。謝肉祭の夜、雰囲気は申し分ない。すると、うぶで生真面目なカストルプ青年は、クラウディアにフランス語で話し出す。「君ト話ストキハ、ボクハ自分ノ国ノ言葉ヨリモコノ言葉ヲ使イタイ」。なぜなら、フランス語で話すのは「夢ノナカデ話スヨウナモノ」だから、などといいながら。

このいささか唐突な「夢」の言語へのシフトが何を狙ってのことだったのかは、やがて明らかになる。というのもカストルプ青年が「愛」のひとことを洩らすからだ。原文では「アムール」（amour）である。たちまち彼の言葉は、熱烈な告白に転じていく。

「コレハホカデモナイ、君ニ対スルボクノ愛ナンダ、ソウダ、ボクノ眼ガ君ヲ見タ瞬間ニボクノ心ヲトラエタ愛、ボクガ君ヲ君ダト認メタト同時ニ知ッタ愛ナンダ」。

クラウディアはその熱い口調に心打たれるふうでもなく、むしろ冷やかしの言葉で応じるのだが、しかしカストルプ青年はもう止まらない。「マルデ気ガチガッタヨウヨ」と呆れられながらもめげることなく、歯をがちがち鳴らし、全身をふるわせながら彼女の足元にひざまずく。そして決定的な一言を発するのである――「ボクハ君ヲ愛シテイル」。

このカストルプ青年のふるまいに、フランス文化・フランス文学受容の一つの帰結、その象徴的な例を見て取ることができる。むろん背景には、第一次大戦前まではまだ、フランス語がヨーロッパの教養人士の共通語として機能していたという事実がある。しかし重要なのは、そのフランス語が「愛」の観念と特別な絆で結ばれているものとみなされ、「アムール」について特別な表現力を持つかのように考えられていたということだろう。フランス人自身が半ば当然のようにそう考えていたし、ヨーロッパの他の国民もまたそう思っていた。

そのような文脈が広く、強力に共有されるに至ったのは、ひとえに文学の影響によるものだった。アムールを表現するのにもっとも適した言葉によって、アムールのあらゆる相を描き出す。フランス文学は取りも直さずそうした文学として深く浸透していった。いわばアムールの教育装置としてのその機能が、極東にまで及んだことは、わが国における荷風以来のフランス文学受容が示すとおりだ。

その一見、あまりに明白な中心テーマとしてのアムールが、現代にいたるまでどのように展開され、変容し、新たな形で引き継がれてきたのかを改めて考えてみたい。対象となるのはフランス文学の有名な作品ばかりだが、それを愛の名のもとに辿り直すことで、近代文学がいかなる作用を読者に及ぼしてきたのかに関する確かなモデルを抽出できるのではないだろうか。よく知っているつもりの作品の数々が、にわかに新鮮な表情を示す瞬間に出会えることも期待しつつ、文学史の現場を訪ねてみたい。

出発点は十七世紀である。「愛」がそこで初めて誕生したというわけでは毛頭ない。アムールを軸に回転するものとしてのフランス文化、フランス文学を成り立たせる近代的な条件が整ったのが十七世紀においてだと考えられるからだ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

はじめに ―― 3

第一章 太陽王と恋の世紀 ―― 9

太陽王の肖像／雅びの道／才女たちの見る夢／義務と恋愛／呪いの炎／寝取られ亭主の問題／結婚の理想と現実／恋愛結婚の礼賛／反ギャラントリー／恋愛との決別

第二章 快楽の自由思想 ―― 37

表紙の誘惑／摂政と極道たち／愛の支配力／ファム・ファタルの世紀／好色文学と哲学／フィロゾフたちの愛／ルソー、真実の愛／結婚はいかにあるべきか／支配への欲望／サド侯爵と清純派

第三章 感情教育 ―― 73

大革命のあと／モーパッサンの老婦人／十九世紀とは何か／「坊や」の登場／会話力不

足／母親の胸／「彼の女」と「わが奥方」／至福のとき／心身二元論／干からびた果実／「幻」のゆくえ

第四章　結婚と愛　113

十二世紀の判決／地獄のほうがまし／愛のある結婚に向けて／二つの道／結婚、家庭、国家／不幸な結婚のリアリズム／不幸を希求する小説／幸福な夫／不穏な妻／エロティシズム／ささやかな真実／愛から殺人へ／限界を超える小説／愛に満ちた結婚は何処に

第五章　親子の愛　163

母性愛の神話、子供の不在／子供の全面肯定／母から娘へのラブレター／父親失格者の弁／失われた子供を求めて／ユゴーと幼児／虐げられる親たち／虐げられる子供たち／愛の鞭／作家への道／子供への愛とは何か

第六章　解放と現在　221

十九世紀との決別／女たちによる愛の奪還／不可能な愛／強奪と恍惚／オートフィクション／聖家族／黄昏のセクシュアリティ？／革命のあとに

おわりに 257
参考文献 261

第一章　太陽王と恋の世紀

太陽王の肖像

フランス史において「偉大な世紀」といえば、十七世紀、ルイ王朝が栄華をきわめた世紀をさす。強力な中央集権国家としての王国を完成させ、ヴェルサイユにヨーロッパ随一の宮殿と庭園を築き、絢爛豪華な宮廷文化を花開かせた「ルイ十四世の世紀」である。

ルイ十四世は生まれたときから「神より賜れし御子」と崇められた。何しろルイ十三世と、スペインからお輿入れしたアンヌ・ドートリッシュが両名ともに十四歳の若さで結婚してのち、国民の待望すること二十四年目にしてようやく恵まれた跡継ぎなのである。そして四歳の年に父が逝去して以来、あっぱれ、七十二年の長きにわたって王座に君臨し続けた。数多く残されている肖像画を眺めるだけで、その存在の華やかさ、偉大さが伝わってくる。ジセーのアトリエ作として伝えられる絵には、宮廷で催されたバレエの舞台に立ち、「昇る太陽」役を演じて踊った少年時代の国王の可憐であでやかな姿がとらえられている。あるいは、国王自らもっとも気に入っていたといわれるイアサント・リゴー作の肖像画（図1）に見られる、威風堂々たる姿。当時六十三歳の王の、肩まで届く長髪のかつら、白テンの毛皮をたっぷりとあしらった絢爛たる衣裳以上に目を引くのは、マントからすらりと伸びたおみ足の見事な脚線美であり、さらにはその足元を固める白いバレエシュ

ーズである。シューズの赤いリボンと赤いヒールがなんともなまめかしい。ここにはいわば、唯一無二の統治者としての王の上半身と、生涯をとおし幾多の美女たちとの恋愛にふけった希代の誘惑者としての王の下半身を同時に見て取れるのだ。

ルイ十四世が太陽王の名をほしいままにしたのは、長年にわたる統治や、絶対主義体制の確立によるばかりではない。それは王がバレエやオペラ、演劇や音楽や文芸を心から愛するとともに、自らに魅惑的イメージを付与するうえでそれらの芸術が重要な手段となることをよく見抜いていたためである。モリエールやラシーヌを始めとする天才芸術家たちを反対派の攻撃から護り、フランス語の統一と醇化、学芸の振興に意を注ぐことで、王は自己の威信を高めると同時に、フランスに空前の文化的活況をもたらした。しかもあらゆる流行の発信源たるヴェルサイユには「かつてみたことのない、立派な紳士や、絵のような淑女」が一堂に会し、「愉悦を極め、華美を尽くすといったありさま」（ヴォルテール『ルイ十四世の世紀』）であ

図1　ルイ14世、63歳の肖像画（リゴー作）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com